



図書館だより

HGU Library

library.hgu.jp

vol.229

November 2023

旅と本

イギリス「ホームレス紀行」へのプレリユード

経済学部地域経済学科准教授 土橋 康人

旅前の読書

人文学部日本文化学科講師 谷端 郷

北京旅行記

工学部社会環境工学科教授 楊 安娜

図書館職員のおすすめ本



イギリス「ホームレス紀行」へのプレリユード

経済学部地域経済学科准教授 土橋 康人



DOBASHI Yasuto
King's College London, Department
of Political Economy, PhD 修了。修士
(経済学) (慶應義塾大学)。専門は英
米政治経済史、国際政治経済学、財政
学。研究テーマは、現代イギリス政治
経済の史的的研究。

世界の矛盾を抱くロンドン

城砦のように分厚い雲海をすり抜け、人を苛立たせることに堪能な熟練職人であふれるヒースロー空港を足早にあとにし、文字通り頭のとっぺんから爪先まで煤だらけにしながら世界最古の地下鉄を乗り継いで、その160年の歴史から一歩外へ這い出せば、そこはロンドンである。100通り以上の表現で形容される雨の隙間から時折のぞく蒼白い顔をした太陽、陰鬱な面持ちで行き交うロンドンナー、そしてかつて世界の中心として君臨した都市の「歴史」が遠慮がちに出迎えてくれるだろう。

イギリスあるいはロンドンから何を思い浮かべるだろうか。何やら華やかな場所をイメージすることもあるかもしれないが、物事はそこまで単純ではない。ロンドンは奥が深く複雑な都市である。使い古された手垢まみれの格言で、「ロンドンに飽きた人間は人生に飽きた人間だ」とのサミュエル・ジョンソンの野暮ったい言葉が後生大事に語り継がれているが、そのようなユートピアは存在しない。属するコミュニティや階級、人種、そして金が常に生活の質の決定要因として亡霊のように



テムズ川沿いで

つきまとう。ジョージ・オーウェルは、窮乏生活に「呆れるほど複雑」とし、イギリスは「貧乏でさえなければとてもいい国」と論評した。それから90年の歳月が流れ、社会は激浪に揉まれている。東ロンドンのHackneyの現状を見てみよう。「The Rolling Stones」の新譜タイトルにもある通り、確かにHackneyはダイヤモンドである。ロンドン・オリピックのための再開発の追い風を受け、ロンドン・ポランの生誕地でもあるこの街には、

アート・ギャラリーや最新の流行を発信するショップに若者が集い、家賃の上昇もとどまるところを知らない。しかし、一杯2、500円ほどのシリアルを提供する店の隣には、食料の寄付に長蛇の列を作る人々が過密状態で暮らす惨憺たる現実が横たわっている(一時期、給食費を支払えない家庭の割合は、40%を超えていた)。この社会的陰陽から滲み出た不満という油は、ロンドンの地に鬱積し、刹那的な火花で暴動や政治闘争という大火へと、いとも簡単に燃え上がるのである。世界の矛盾と対立が集まり戦わされる場所、それがロンドンである。その一方で、上流層も社会的梯子を転がり落ちないよう必死だ。子供の学校のレポートを少しでもリアルティの高いものにするため、世界中を家族で駆け回る親も存在する。質の高い教育と安全な生活のために必要な金額は天井知らずであり、そのための選択もまた複雑なのである。

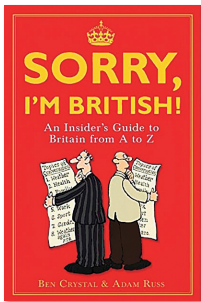
そんなロンドンには、他にも訪れる者の心を捉えて離さない多くの魅力がある。元ロンドン市長で、時のサッチャー首相と鋭く対立したケン・リヴィングストンは、「300種類の言語を話す人々が互い

おすすめの本



『愛と戦いのイギリス文化史 1951—2010年』

川端康雄・大貫隆史・河野真太郎・佐藤元状・秦邦生 編
(慶應義塾大学出版会 2011年)



『Sorry, I'm British!: An Insider's Guide to Britain from A to Z』

Ben Crystal & Adam Russ 著
(Oneworld Publications 2010年)



『新装版
オーウェル評論集 1～4』

ジョージ・オーウェル 著／川端康雄 編
(平凡社 2009年)

に調和するロンドンは、多様な人種が共に成長し、共存し、学び合う都市を代表している」とした。ヒトラーがシオニズムに賛同していたとする、反ユダヤ主義的コメントによって失脚した政治家とは思えぬ優等生的な言葉である。いずれにしろ、多様な人間が集まる場所には、多様な歴史が生み出される。Anna Quindlen の言葉を拝借すれば、ロンドンの全てのドアには、それぞれのストーリーが存在するのだ。例えば、パディントン駅からハイド・パークを経てロイヤル・アルバート・ホール方面へ歩きながら、街の歴史に耽ってみると良い。社会や芸術、政治に関する歴史が惜しげもなく散乱した通りをいくばくか進めば、赤と白の煉瓦造りの歴史的建造物にもすぐに適応し、街に溶け込むことができるだろう。そこから、テムズ川に沿って政治の中心地を横目に Waterloo まで移動し、薄暮に浮かび上がる the Strand や the City をぼんやりと眺めるのが格別だ。文化と資本の中心地に慌たたく群がる人々や観光客の喧騒に紛れ、世界の活力と優雅な孤独を味わうことができるだろう。

郊外における美と憂鬱

ロンドンから離れるのも良いだろうが、大きな期待は禁物である。スタンダールは「赤と黒」の中で、ジュリアン・ソレルに「イギリスの田園ほど美しく、素晴らしく、心を動かされるものは世界にな」と野心に目が眩んだ非世俗的な世界観を熱弁させているが、これもまた個々人の境遇によるのだ。平日は家賃50万円ほどのロンドンの借家に住み、週末に数億円の郊外の家に戻る生活ができれば田園も魅力的に感じるだろう。だが、犬の散歩道となっている緑地の開発が進まぬが故に、「取り残された」人々の生活環境の改善が遅れ、行き場のない鬱憤が堆積し続けているのも現実だ。

いずれにしても、イギリスの郊外は美しいという点に異論はない。興味があれば、Brighton や Windsor などへ足を延ばしてみるのも良いだろう。最上流階級の子息が集い数々の首相を輩出するイートン校を近隣に抱え、故ダイアナ妃の元夫が主を務める Windsor 城周辺には穏やかな時間が流れ

ている。城から真っ直ぐ伸びる美しい Long Walk を歩けば、The Eton Rifles を歌った The Jam のポール・ウェラーがなぜ息子をイートン校に入学させたのかを皮肉たっぷり理解することができるだろう。

幕開けか終幕か？

イギリスは大変興味深い国であることに間違いない。そのようなイギリスの社会や政治経済ならびに「人」という複雑に絡み合った編み物を、研究者のアカデミックなサークルだけでなく、かつて世界の諸国家を蹂躪した金融資本によって構成されるアッパークラスのコミュニティーから、「ホームレス」やトラベラーズ・キャンプなどの「ボトム」階層に至るまで、心ならず身を挺して観察してきた筆者の経験を糸口としながら、機会を改めて紐解くことができればと考えている。もちろん需要があればだが、乞うご期待？



水尾集落の棚田

旅前の読書

人文学部日本文化学科講師 谷端 郷



TANIBATA Go

立命館大学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程地理学専修修了。博士（文学）（立命館大学）。専門は人文地理学。研究テーマは、歴史災害研究、近代日本の都市水害に関する地理学的研究。

この度、「旅と本」というお題をいただいた。「旅の本」であれば、最近では『地球の歩き方』シリーズの対象地域が国外だけでなく国内にまで及び、「地球の歩き方」の質と量が、国内旅行でも役立てられるようになったのがある。このような旅行ガイド本は旅先での巡る場所やルートを決める際には適しているが、そういった旅行計画を立てつつ、旅先の歴史や文化などについての予備知識を仕入れながら、旅前に旅の気分を徐々に高めるための読書というのが、一方であるような気がしている。

『街道をゆく』シリーズ

私は調査旅行にしろ、プライベートでの旅行にしろ、ある程度旅先が決まった段階で、旅先が司馬遼太郎の『街道をゆく』シリーズで取り上げられていないかを確認するようにしている。このシリーズを全部読破したわけではないが、これまでに、京都、島原、仙台、台湾などの旅行の際にそれぞれの巻を通読した。内容はほとんど忘れてしまったし、それが旅にどれだけ役に立ったのかも正直覚えていない。ただ、司馬遼太郎の軽快な筆致で、旅先の歴史や人物や文化が縦横無尽に語られるので、知的好奇心が満たされながら、旅行気分を否が応でも高めてくれる。

印象的だったのは、京都の嵯峨嵐山の巻（「嵯峨散歩」）である。嵯峨嵐山といえば、桂川にかかる渡月橋、天竜寺、竹林などが有名だが、そのいずれから書き始めるでもない。あるいは、嵐山の西方の丹波の山中に三尾（高雄、楨尾、梅尾）と呼ばれ

る地域があり、鳥獣人物戯画で有名な高山寺など名高い寺院が密集しているが、そこから始まるわけでもない。京都でもあまり知られていない、丹波山中の「水尾（みずのお）」と呼ばれる地域から書き起こされるのである。そこでは、実際に隠棲し陵墓もある清和天皇（水尾帝と呼ばれた）に思いを馳せたり、そこに群生している桜（しきみ）についての蘊蓄が披瀝されたりする。通常の観光地ではない場所の、あまり知られていない歴史や文化に関する知識が得られるので、『街道をゆく』シリーズを読むと、そういう旅がしてみたいと旅行気分は徐々に高められていく。

ただ、一つ司馬遼太郎の旅でいただけだと思っただけでは、移動手段としてタクシーが結構使われていることである。大作家である以上致し方ないところではあるが、車は広範囲を廻れる一方で地域を点と線でしか理解できない。時間の許されるかぎり、徒歩で歩き回る時間を設けて地域を面的に把握することを心がけたい。

地名辞典

では、『街道をゆく』シリーズで取り上げられていない地域はどうすればよいか。常にそうしているわけではないが、私の専門が地理学ということもあって、地名辞典を読むことをぜひお勧めしたい。地名辞典の中でとくに大規模なものに角川出版社の『角川日本地名大辞典』と平凡社の『日本歴史地名大系』という二つのシリーズがある。地名辞典といえば、地名の由来について記述されているもの

というイメージを持たれているかもしれないが、大規模な地名辞典になると、地名の由来だけでなく、地域の略史や地誌的な内容が簡にして要を得た記述でまとめられている。

一つ例を挙げると、道北の中川町に出張する必要があった際、『角川日本地名大辞典』の「中川町」の項目を読んでみたことがある。アイヌの生活、松浦武四郎の探検、入植などの歴史が一通り語られた後、台風による災害や冷害、酪農経営の行き詰まりなどで離農、離農…。中川町の発展の陰には涙なくしては語れない苦勞の数々が垣間見られた。やや大げさな言い方になってしまったが、旅先では地元の方々の心性（メンタリティ）、たとえば地域で大事にしているもの（風景、偉人、食べ物、歴史等）が、実は観光の文脈とは少し異なっていることもあるので、そういった本音の部分に触れたいと常々思っている。一度の旅行や調査では土台無理なことだと分かっているし、地名辞典にそういったことが書かれている保証もないのだが、旅行ガイド本では扱いきれていない部分が見えたりするので、旅前の気分を高めるのに地名辞典はうってつけである。

角川出版社版『角川日本地名大辞典』も平凡社版『日本歴史地名大系』も本学附属図書館の電子リソース「ジャパンナレッジ」に収録されているので比較的容易にアクセスできる。また、地名辞典の記述に飽き足りなければ、さらに当該地域の市町村史などを紐解いてみるのも良いだろう。このように旅前を楽しむ読書もあるのではないだろうか。

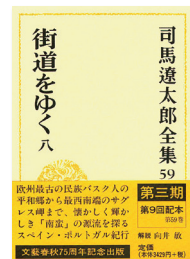
おすすめの本



『日本歴史地名大系 1 北海道の地名』
永井秀夫 編・監修
(平凡社 2003 年)



『角川日本地名大辞典 1 北海道 下巻』
編者：角川日本地名大辞典編纂委員会
(KADOKAWA 1987 年)



『司馬遼太郎全集 59巻 街道をゆく 八』
※「嵯峨散歩」収録
司馬 遼太郎 著
(文藝春秋 1999 年)

辞典は館内閲覧限定です。
ぜひ便利な
「電子リソース」を
ご利用ください！

電子リソース
の利用方法

1. 図書館 HP を開く

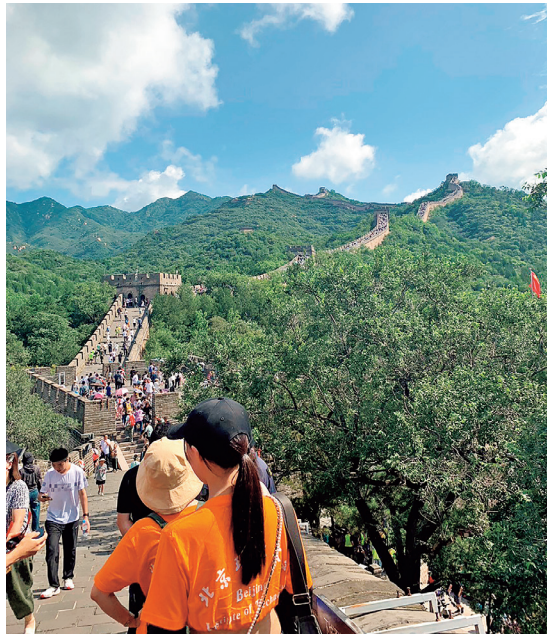
2. 「資料を探す・調べる」から「電子リソースを使う」を選択

3. 今回のおすすめ本(辞典)の場合「ジャパンナレッジ Lib」を選択

学外からアクセスの際は「学外アクセスサービス」を利用します



世界遺産 頤和園の一角



世界遺産 万里の長城

北京旅行記

工学部社会環境工学科教授 楊 安娜

YANG Anna
北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了。博士(文学)(北海道大学)。専門は中国語学。研究テーマは、現代中国語における結果補語構造に関する研究、中古漢語における副詞に関する研究。



今年の夏、中国に行く機会がありました。引率で実家には帰れなかったですが、4年ぶりに祖国の地に足を踏み入れることができたことに感慨深いものがありました。

北京の暑さは耐え難く、まるで『西遊記』に描かれた「火焰山」のようです。協定校は私たちに観光プログラムをたくさん用意してくれました。頤和園、長城、天壇などの歴史的な遺跡は、長い年月を経過してもなお「帝国と権力」の威厳を感じさせてくれます。しかし、私は一般市民の「日常生活」を観察するのが好きです。

中国の大学には基本的に学生寮と教職員の寮があり、一つの生活コミュニティとなっています。私たちが居候していた大学もそうです。キャンパスを歩くときかなり高い確率で道端で雑談している北京のおじさん、おばさんたちに遭遇します。中国の「普通話(標準語)」は北京語の発音を基にしていますが、北京の地元の人たちが話す北京語は、発音や語彙の面で「普通話」とは異なる特徴があります。例えば、北京語では「儿化音(R化音)」や略音を多用し、私のようなよそ者にはちょっと理解しづらいことがあります。また、普通話では「麻烦您(マー・ファン・ニン)」(お手数をおかけします)と言いますが、北京の人々は「您受累(ニン・シヨウ・レイ)」と言うことが多いです。私はこの響きが非常に気に入って何度もマネして使いましたが、どうしても北京のおじさんやおばさんのような「味わい深い」発音にはなりません。彼らの「井戸端会議」の内容を聞くと、おじさんたちは年金がいつ上がるかといっ

た生計に関する話題、おばさんたちは自分の息子や娘が結婚しないことに不満を言ったりするなど身の回りの話題を会話のネタにすることが多いです。

最初の一週間、私は油条（揚げパン）、豆乳という中国人の定番の朝食をよく注文していました。シンプルながらも私の胃袋を大いに満たしてくれました。食堂に集まっている人たちはテレビのニュースには見向きもせず料理の注文や知人との挨拶などに夢中です。もちろん、中には大きな声で歓談する人たちもいますが、眉をひそめる人は一人もいません。食事が終わると、テーブルの上に卵の殻や他のごみが置かれているのをよく見かけます。一緒に北京に渡った日本の学生が私に「なぜ彼らはゴミを片付けないのですか？」と質問してきました。私は意識的にその理由を考えたことはなかったのですが、すぐに答えられませんでした。後に、北京に詳しい先生に尋ねたところ、中国の大学の食堂は専門の掃除スタッフを雇っており、ゴミ回収、テーブルの清掃は彼らの仕事だと説明してくださいました。つまり、誰かがテーブルにゴミを置かなければ、掃除スタッフは仕事を失ってしまうというわけです（人件費が安いことや人の仕事を奪わないという心遣いが関係している）。なるほど、一見、「不合理」な現象の背後には、往々にして「納得できる理由」が存在しています。面白いことに、中国ではこのようなことは多々あります。

食堂から留学生寮に戻ると、そこで働く職員さんたちに会えます。彼らの大半は30代で、仕事柄普段異なる国の留学生たちと接触しており、外国文化に



油条とラテ

対する関心度が高いです。今回世話をしてくれたGさんもその一人です。30代前半の彼女は日本語はわからないのですが、フィギュアスケーター羽生結弦の大ファンだそうです。好きな理由を尋ねたところ、ストイックに追求するところで、自分もそのような人間になりたいと彼女は話っていました。これとは別に彼女は家族から結婚への圧力を受けていますが、今は悔いを残さないようにやりたいことに打ち込みたいと今時の中国の若者らしい発言が返ってきました。それを聞いた私は思わず道端で未婚の子供の将来を案ずるおばさんたちが悩んでいる姿を思い出しました。二世世代間の30年の差はちょうど中国が大きな変化を経た30年でもあり、親と子の間の価値観の違いが今までもよりも顕著になった時代と重なります。しかし、これもまた悪いことではないかもしれません。

北京滞在の最後の数日間、とうとう油条と豆乳という朝食に飽きてしまいました。そこで、気まぐれ

おすすめの本



『中国人のこころ
—「ことば」からみる思考と感覚—
小野 秀樹 著
(集英社 2018年)



『相席で黙っていられるか
—一日中言語行動比較論—
井上 優 著
(岩波書店 2013年)

に油条とラテを注文しました。案の定、ラテはハズレでしたが、そこに砂糖を加えたら、意外にも油条との相性が抜群でした。しかし、この新しい食べ方を自分の親には言えなそうです…。

北京での2週間は非常に充実していました。有名な名所や史跡を訪れただけでなく、そこで暮らす人々と話す時間もたくさんあり、教科書には載っていないリアルなその土地独自の「文化」に深く触れることができました。

短期旅行も、もちろん素晴らしいのですが、よりサブライズな何かを求めるなら、2週間以上のディープな旅もおすすめです。時間が許すならばという条件付きですが…。

図書館職員のおすすめ本

図書館には「ことりっぶ」「地球の歩き方」など、おなじみの旅本が国内外問わずシリーズで揃っています。旅行記や各地の歴史・アートに関連するものも豊富です。旅行計画はもちろんのこと、授業の空き時間や勉強の息抜きに、ぜひ覗いてみてください。



1 『【マイナビ文庫】大人の旅じたく』

柳沢 小実 著
(株式会社マイナビ出版 2019年)

大荷物になった割には肝心なものが入っていない…。旅の準備は苦手と思っている方も多いのでは？ 本書はパッキングの仕方や旅の必需品・あると便利なものなど、写真を交えてコンパクトに説明されています。サクッと自分なりの旅支度が出来るようになりたい人には、真似したいアイデアが詰まった一冊です。



2 『世界の美しい書店 WE LOVE BOOKSTORE』

今井 栄一 著
(宝島社 2014年)

一枚の写真を見て旅先が決まる、ということもあるかもしれませんが。本書は、名前の通り世界中の書店が美しい写真とともに紹介されています。様々な書店が街並みに溶けこんでいる様子を見ると、その国の人々の暮らしがぐっと身近に感じられ、観光名所と同じくらい魅力的にうつります。日本の書店も掲載されています！



3 『それでも旅に出るカフェ』

近藤 史恵 著
(双葉社 2023年)

旅ができない閉塞感の漂う時期が続いても、日々に旅のエッセンスを加えて、沈みがちな気持ちを外につれ出してくれる。飲食店だから出来る役割をこの本が思い出させてくれました。本に登場した「中国の湯圓」も「アイランドのクレイナ」もいつか食べてみたいけれど、まずは近くのお店に足を運んでみよう、と思えた一冊です。



4 『京都 12か月 11月の京都』

淡交社編集局 編
(淡交社 2016年)

※ 1月～12月まで全12冊の所蔵あり

桜に紅葉にと季節ごとの美しさで人気の「京都」。そんな京都の旅にまつわる本は、図書館でも相当数のラインナップです(本館3F旅本コーナーだけでも書棚2段にわたりずらり)。本書は、祭り・食・自然・神社仏閣など、京都のおすすめが月別で紹介されています。旅行計画の最後にチェックしてみてください。

5

本ではありませんが…図書館にはたくさんの視聴覚資料が揃えられています。授業の空き時間に映画で旅行気分はいかがですか？

おすすめ DVD 『ツーリスト』(配給ソニー・ピクチャーズエンタテインメント 2011年)
ジョニー・デップとアンジェリーナ・ジョリーの世紀の競演作！美しいベネツィアの風景も堪能できます。

DVD・Blu-rayの
探し方

1. キーワードやタイトルを入れてOPACで検索

1. 2Fサービスカウンター横の「視聴覚資料」または「料リスト」から探す

2. 2Fサービスカウンターで手続き

3. 3FのAVブースで視聴(貸出は行っていません)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより

2023年11月15日発行 第45巻2号(通巻229号)

編集・発行 / 北海学園大学附属図書館

062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1-40 Tel 011-841-1161

<https://library.hgu.jp>